

「モノと情報」班 C

原野農芸博物館のラオスコレクション
小島 摩文（鹿児島純心女子大学）

キーワード：原野農芸博物館、ラオスコレクション、原野喜一郎、馬と道具

The History of Harano Agricultural Museum and Its Laos Collection

Mabumi, KOJIMA (Kagoshima Immaculate Heart University)

Keywords: Harano Agricultural Museum, Laos collection,
 Kiichiro HARANO, Material Culture with Horse

1. はじめに

「モノと情報」班の全体報告でもふれられているように、原野農芸博物館のラオス・タイ資料は国立民族学博物館の同地域収集資料をしのぐ点数となっており、国内のこの地域のコレクションとしては欠かすことのできない資料となっている。

私は 1994 年から 1997 年まで原野農芸博物館に学芸員として勤務しており、タイの民具調査・収集にも参加し、また原野農芸博物館退職後も、民具収集の中心メンバーである山崎久勇氏・澤田氏のラオス調査に同行した。こうした経緯から、小稿では原野農芸博物館の沿革やコレクションの背景・意義について報告したい。

2. 原野農芸博物館

原野農芸博物館の母胎は、原野喜一郎が昭和 33（1958）年に大阪府豊中市に開いた原野農園である。これは農業を経営しながら、一般に敷地を開放してレジャー施設とした農園である。

昭和 39（1964）年には、門真市の葛岡亨氏より江戸時代に建造された家屋の寄贈を受け、一年がかりで原野農園に移築し、この旧葛岡邸の中に農具や民具などを展示して服部農業博物館として開館した。折しも日本人の生活様式が大きく変る時期にあり、農具や民具を集めるにはまたとない機会であった。

昭和 43（1968）年には原野農芸博物館と改名。後に組織を財団法人として「財団法人 原野農芸博物館」となる。当時、大阪市立博物館の学芸員であった岩井宏實氏の編集により『原野農芸博物館図録 第 1 集 日本の民具 - 農具編 -』（1968）、『原野農芸博物館図録 第 2 集 日本の民具 - 衣食住編 -』（1969）を発行。その後 1969 年から 1978 年にかけて図録を第 11 集まで発行する。また、1977 年には第 1 回近畿民具学会総会が原野農芸博物館で開催され、関西の民具研究の中心的役割を果たした。この十年は原野農芸博物館の黄金時代ともいうべき時期であろう。さまざまなブレーンを迎えて充実した活動を行っていた。

この間、原野喜一郎は奄美大島、沖縄に興味をむけ、さらに海外へと博物館資料の収集地域を広げていく。1975 年には中国雲南省の西双版纳を旅行し、中国の少数民族と日本との関係に関心を寄せるようになった。

さらに、昭和 63（1988）年より鹿児島県奄美大島住用村に博物館を移設、平成 4（1992）年には、財団法人奄美文化財団を設立し、原野喜一郎が理事長に就任する。翌年には財団を運営母体として原野農芸博物館を登録博物館とする。こうして原野農芸博物館は、歴史系の博物館として鹿児島県で唯一の登録博物館となった。同館の礎を築きあげた原野喜一郎は 2001 年 7 月 22 日に 94 歳で逝去した。

3. ラオスコレクション

原野農芸博物館のラオスコレクションは、原野喜一郎の長男でもある現館長の原野耕三氏が中心に収集した資料である。1988 年の大阪から奄美大島への博物館移転作業が一段落すると、耕三氏は博物館の資料の充実を図るために、海外資料収集を計画し、次第に収集対象地域を広げていく（以下の表－1 を参照）。

ファイル名（地域別、標本カード）		点数
ラオス		1200
ベトナム		526
タイ		1093
中国		600
島嶼部	インドネシア	200
	マレーシア	200
	フィリピン	218
	パプア・ニューギニア	333
	台湾	200
その他	カンボジア	29
	ミャンマー	219
	ナガ	125

表 1 : 原野農芸博物館海外収集資料の点数一覧

〔2003 年 8 月現在〕

耕三氏が最初に調査地を選んだのは、父、喜一郎が興味を持っていた雲南省であった。1994年12月、まず現地の状況を視察するために、「秘境ツアー」で有名な西遊旅行による雲南省の少数民族を訪ねるツアーに参加する。この旅行のツアーコンダクターをしていたのが写真家の山崎久勇氏である。後に山崎氏は学芸員として迎えられ、原野農芸博物館は中国・タイ・ラオス・ベトナムなどの民具資料収集を精力的に行うようになった。また、山崎氏の他のツアーに参加していた染織専門家である澤田氏も学芸員として迎えられ、収集・調査に加わる。数次にわたる調査の結果、古い民具がよく残っているラオスで集中的に資料収集を行うこととなる。

原野農芸博物館のラオスコレクションは、まず量的に非常に価値が高い。生活道具全般がまんべんなく、しかも各地域から広く集められている（資料－１を参照）。一点一点についても収集の経緯や村の名前などがよく記録されており、さらに使用品が多いことなどから民具としての資料的な価値も高い。なかでも、染織関係の資料は専門家の澤田氏が注意深く収集・整理しており、一点一点の布、衣服として価値があるばかりでなく、着衣の組合わせが意識されている点でも評価でき、この地域の資料としては第一級の資料となっている。

また、棒締頭絡とよばれる馬の制御具のコレクションも意識的に収集されており、私の知る限りでは世界有数のコレクションとなっている。

資料一：原野書芸博物館ラオスコレクションにおける4つの道具グループの収束地および対象民族

収量地 / 栽培農園	収量 なし	タイ	ラオ	アホ	タイ・ ルー	ラー	バンモン	モシ	アロー	スパー アホ	黒モン	タイ・ ヤン	黒タイ	ランタ ン	タイ・ ユアン	デー リー	カム	タイ・ ハル サー	黒タイ	サオ	アラッ ク	オニ	ヤホン	ナボ	バセー	カセー	タイウ	サオイ	インザ	計
ピエンチャン	34	2	4																											
ボンサリー			1	10	42	1	1	2	7	1	3	4																		7
ルアン・ナスター			10		8			1			1		32	46	4	2	7	1												10
ルアン・ブラバン	2		1	1	9			2			16						23													5
ボケオ	15				8																									2
シェンクワン			2			1						1																		
サムヌア			4			1					1	31					5		26	14										13
アトプー	1		2																		20	9	13	11	1					5
サラワン																											4	5		
チャンパサック	1																				15						7	12	10	4
チェンマイ				5	1																									
バンコク	2																													
計	55	2	66	12	67	1	3	5	7	1	21	4	64	40	4	3	35	1	26	14	35	9	13	11	1	11	17	10		

4. 展望

原野農芸博物館のラオスコレクションは、生活道具全般に渡ってまんべんなく集められているので、さまざまな研究に利用することができる。モノと情報班による「道具の検討会」と絡めれば、漁具、カゴ類、狩猟道具、利器（農具、大工道具その他）など、それぞれに、同じ用途で用いられる道具を取り上げて見ても、豊富な資料数ゆえに微細な地域差の比較研究などが可能であろう。

私は、原野農芸博物館在任中に会ったメコン河流域地域の馬具についても独自に研究を進めてきた。生態史プロジェクトのなかで、同地域内での馬具利用に関する情報を、広く集めていければと考えている。写真や名称、使役されている馬の性別、馬の入手先など、簡単なデータでも、広範囲に情報を集めれば、これまで見過されてきた馬の利用のあり方を、資源管理という観点から明らかにできると考えている。